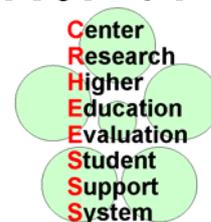


週刊センターニュース

No.107



第107号(2006年5月1日)毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

共同学習会のご案内

第114回 日時: 5月11日(木)16:30~18:00

場所: 角間キャンパス総合教育棟2階大会議室

報告者: 早田 幸政(大学教育開発・支援センター 評価システム研究部門)

テーマ: 設置認可システムの改革と高等教育の質保証

趣旨: 規制緩和の流れの中で、設置認行政も緩やかになってきた。そうした制度的背景の下、株式会社立大学の跋扈は、高等教育の十全な質保証の懸念材料ともなりつつある。本報告は、設置認可と認証評価の協働のシステム化の方向性を視野に入れ、現下の高等教育改革の方向性を考究する上での一素材を提供しようとするものである。

シンポジウム「理系 AO 入試を通じた高校と大学の接続」参加報告

3月21日、神戸大学発達科学部主催のシンポジウム「理系 AO 入試を通じた高校と大学の接続 21世紀における科学者養成の新展開を目指して」に参加した。発達科学部主催ということもあったかと思うが、参加者約80名のうち半数は高校の先生方で、シンポジウムの主題どおりアドミッションオフィス(AO)入試という接点を通して大学と高校の教員とが5つの講演を基に率直な意見を述べ合った。講演の一つでは、千葉県立千葉高等学校教諭の堀享氏によるスーパーサイエンスハイスクール(SSH)指定の同校での取り組みが紹介された。堀氏はそのような努力が無駄にならない大学の入試、教育との接続の必要性を強く主張された。学習指導要領の外でいかに熱意ある科学教育が行われているかを実感するとともに、入試によって双方が大きく変わりうることを認識した貴重な機会となった。

「アドミッションオフィス方式(総合評価方式)」は、数年前に東北大学、東京大学、九州大学で初めて導入され、新たに導入する大学が拡大しつつあるが、その入試方法にはかなりの幅がある。今回のシンポジウムで取り上げられたのは、愛媛大学のスーパーサイエンス特別コースのAO入試と神戸大学発達科学部のAO入試で、ともに将来の科学者になりうる人材を見出すことに特化したものである。理科離れや学力低下が指摘される現状において、優秀な理系学生をいかに確保するかという強い危機感がAO入試導入の背後にある。国立教育政策研究所総括研究官の鳩貝太郎氏の講演で説明されたが、SSHをはじめサイエンス・パートナーシップ・プログラム(SPP)など高等学校での科学教育振興政策が拡大する方向にあり、愛媛大学、神戸大学のAO入試では、これら高等学校でのプログラムで教育を受けた学生が受験生として想定されているようである。AO入試方法としては、面接のほかにも実験や発表をさせて十分な時間をかけて人間性や科学者としての資質を見極める方式が増えつつある。愛媛大学、神戸大学のほかにも広島大学、岡山大学の「マッチングプログラム」、首都大学東京のゼミナール入試など特徴あるAO入試が拡大しつつある。九州大学の21世紀プログラムについては本センターニュースや昨年3月の当センター主催第2回大学教育セミナーで紹介したが、そのAO入試方法は上記のAO入試にも影響を与えているようである。また、大阪大学、早稲田大学、東京理科大学など、国際物理学オリンピックや国際数学オリンピックでの入賞者には一般入試を免除するといった大学も出てきている。

本シンポジウムの基調講演において、九州大学教授の小田垣孝氏はブランダイス大学で教鞭をとった経験を基に、アメリカの入試と日本の入試を比較し、少子化、大学全入時代が到来する今、今までどおりの入試でほんとうによいのか、高校と大学とが協力して何らかの入試のあり方を考えるべきときになっているのではないかと述べられた。さらに九州大学のAO入試の概要を説明された。2006年度入試では、21世紀プログラムも含めて8学部16募集区分で募集人数は179名であった。小論文のほかに実験道具を用意して何か実験をさせて答えを出させるという課題なども一部の学部で実施されている。

愛媛大学助教授の井上敏憲氏は、平成17年度から導入された愛媛大学スーパーサイエンス特別コースのAO入試について紹介された。沿岸環境科学研究センター、地球深部ダイナミクス研究センター、無細胞生命科学工学研究センターが教育を担当する学士課程・大学院博士課程一貫的教育システムである。定員は15名で、出願要件は大学院進学希望者であること、高校での全体評定平均値が4.0以上または数学と理科の評定平均値が4.2以上または科学系コンテスト等で高い評価を得た者となっている。選抜は、書類選考ののち講義を受けて内容をまとめるレポート課題(3時間)と与えられた問題を解決する実験方法を考案する課題(4時間)30分程度の面接で行われる。10月には合格者が決まり、その後密度の高い入学前予備教育が行われる。

神戸大学教授の中川和道氏は、発達科学部人間環境学科で平成18年度から導入された理系AO入試について説明された。定員は8名、書類選考ののち10月に「理科に関する課題研究」のポスター発表を学会発表形式で行わせる。高校でのSSHや科学クラブの活動を発表させる。この時点での選考通過者を決めるが、最終的にはセンター入試の結果を加味して最終合格者を確定する。

5つの講演のあと討論が行われた。多くの時間と労力を費やして選抜した学生の持ち味をさらに伸ばすような仕掛けを大学は用意できているのか、科学者の養成のためには高校や大学学部教育においてはむしろ基礎学力の養成やリベラルアーツ教育を重視すべきではないのかなど様々な意見が交わされた。それぞれに核心をつく疑問や意見を聞きながら、このような議論を継続し、いかにして「自分で問題を見つけ自分で考える」ことに導き、そのような能力をいかに見出すかについて、大学と高校、さらには小中と協力して考えていく必要があるように思えた。

(文責 大学教育研究開発部門 西山宣昭)

当センターの研究成果を、学会で報告いたします

日本高等教育学会第9回大会(担当校: 国立大学財務・経営センター)

日時: 2006年6月3日(土)、4日(日)

場所: 学術総合センター(東京都千代田区一ツ橋)

自由研究発表 教員・研究者部会(6月4日 10:40-11:35)

タイトル: 「教員組織改革の現状と方向性

- 文部科学省委託に関するアンケート調査の中間報告をもとに -」

報告者: 早田幸政(金沢大学)・青野 透(金沢大学)・

渡辺達雄(金沢大学)・工藤 潤(大学基準協会)

本報告はタイトルにもありますように、本学が委託を受けました、文部科学省の「先導的大学改革推進委託」研究事業「今後の大学像のあり方に関する調査研究: 教員の所属組織」(『週刊センターニュース』90号参照)に関する中間報告となるものです。

日本高等教育学会は、その会則に「高等教育研究の推進及び研究成果の普及並びに会員相互の研究交流の促進を目的とする」と謳っているとおり、その学会大会や学会誌は、大学教育研究の成果を広く世に問う貴重な場となっております。今次の学会の詳細スケジュールは、

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jaher/9kai/Program.pdf> をご参照ください。

当センターメンバーの報告のみならず、大学教育に関心をお持ちの方々の参加を希望します。